

学校におけるオリimpiズム普及のツールとしてのピエール・ド・クーベルタン賞 ードイツとオーストラリアの場合ー

Pierre de Coubertin Award as a tool for spreading Olympism at schools : Case studies of Germany and Australia

田原 淳子, 森脇 保彦

Junko TAHARA and Yasuhiko MORIWAKI

はじめに

国際オリンピック委員会 (IOC) をはじめ、オリンピック・ムーブメントを牽引する組織によって、「ピエール・ド・クーベルタン賞」(以下、「クーベルタン賞」と略す) が設けられている。オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタン (1863~1937) の名を冠して、オリンピック・ムーブメントに優れた功績のあった人物や組織等を表彰している。その対象は多様であり、例えば、国際ピエール・ド・クーベルタン委員会 (CIPC) の場合は、若手による優れたオリンピック研究を評価の対象として賞を授与している (修士論文部門・博士論文部門)。その目的は、オリンピックに関する学術研究の奨励・推進である。

本稿では、それとは別に学校の生徒を対象としたクーベルタン賞を取り上げる。そして、オリimpiズムを普及する手段としての賞のあり方をドイツとオーストラリアを例に検討し、日本でこうした賞を創設する意義について考察した。

1. 生徒を対象としたクーベルタン賞の国際的な広がり

世界で最初に生徒を対象にしたクーベルタン賞を創設したのは、オーストラリアである。オーストラリアは、2000年シドニー大会の開催が決定した1993年にシドニーを州都とするニューサウスウェールズ州で、オリンピック教育の一環として高校生を対象に同賞が創設された。それを皮切りに各州に広がり、全国で実施されるようになった。

その後、2002年にドイツで創設されてからは、オーストリア (2005年~)、ノルウェー、スロバキア、南米のパラグアイ、ウルグアイ (2010年~)、グラン・カナリアとアルゼンチン (2011年~)、中国の北京 (2012年~) でも実施されるようになり、キプロスやポーランドでも実施が検討されている¹⁾。

2. ドイツにおける「クーベルタン生徒賞」

ドイツでは、2002年に設立されたドイツ・ピエール・ド・クーベルタン委員会の提案により、現在16州中6州でクーベルタン生徒賞 (Pierre de Coubertin-Schülerpreis) が授与されている^{注1)}。ここでは、テューリンゲン州を例に、賞の詳細を見ていくことにする²⁾。同州では、クーベルタン生徒賞について、オリンピックの創始者ピエー

ル・ド・クーベルタンのアイデアを体現した模範的な生徒に授与される名誉ある賞であると説明している。

(1) 学校が推薦する候補者の条件は次のように定められている。

- ・優れた運動能力と課外活動に積極的に参加していること（ただし、学校で最高のアスリートに贈られる賞ではない）
- ・課外スポーツでの活躍に限らず、スポーツ^{注2)}（体育）以外の教科でも優れた成績を修めていること
- ・公正な態度や日常生活における社会的関与など、人物としても評価できること
- ・候補者は1校1名までとすること

(2) 同賞の選考基準^{注3)}は、以下のように定められている。

- ・同州の高校卒業試験合格者（アビトユア取得者）、在校生の場合は最上学年の生徒
- ・学校のスポーツで優れた成績を取めた者
- ・オリンピズムの意味を態度・行動で示した者
- ・スポーツ（体育）の授業の理論と実践において非常に優れた成績を取めた者（学校の職員会議で検討）
- ・音楽、美術、歴史、社会、地理、フランス語のいずれかで（クーベルタンの活動分野）、優れた成績を取めた者
- ・課外活動または学校外のスポーツ活動で優れた成績を取めた者
- ・クーベルタンのモットー「遠くを見て、率直に語り、毅然として行動せよ」に基づいて行動している者
- ・スポーツに長期的に関与している者（スポーツアシスタント、トレーナー、審判員など）
- ・学校内や協会等で責任を担っている者（スポーツクラブ、ボランティア消防隊、学校合唱団、学校プラスバンド）、自治体や国際的な活動、交換プログラムへの参加など

(3) 選考と賞の授与は、次の手順で行われる。

- ・クーベルタン賞の授与は1校で1名までとする

（1校で複数名の候補があった場合には、対象から除外）

- ・候補者の情報は、スポーツ（体育）に関する会議で集約され、州の教育委員会に提出される。その後、州のスポーツ協会へ送られる。
- ・受賞は、州政府のワーキンググループ「子供のデイケア-学校-スポーツクラブ」で決定される。
- ・表彰式では、州の教育科学文化省とドイツ・ピエール・ド・クーベルタン委員会によって受賞者に賞状とメダルが授与される。

(4) クーベルタン生徒賞の意義について、テューリンゲン州スポーツ協会会長のペーター・ゲッセル（Peter Gösel）氏は、次のように述べている。

- ・スポーツがもつ教育的な目標を追求するもの
 - ・スポーツの分野で生徒賞を受賞することで、学校全体でスポーツの教育的意義が強調される
 - ・学校スポーツの重要性が再認識される
 - ・学校内のコミュニティだけではなく、学校外にも一般に知られることになる
 - ・公正などの倫理的な価値の推進になる
 - ・社会活動の評価（ボランティアなど）になる
- 同州では、その年の受賞者を写真入りで紹介する冊子が作成されている（Thüringer Ministerium für Bildung, Jugend und Sport, 2019）。

3. オーストラリアにおける「クーベルタン賞」

オーストラリアで「クーベルタン賞」が開始された経緯は前述したが、高校生を対象に年に一度、オーストラリアオリンピック委員会主催、州のオリンピック委員会（Olympic Council）主管で実施されてきた。案内状は、州内の公立・私立全ての高校に送付され、候補者の推薦はドイツと同様に各学校1名までとされた。

(1) 選考基準は、以下のように定められた³⁾。

- ・学校の体育活動に一貫して積極的に参加していること
- ・水泳、陸上競技、クロスカントリーのいずれか

で学校を代表して試合に出場し、少なくとも2つの競技スポーツを実施していること

- ・オリビック・ムーブメントを表現するオリジナルの芸術作品を1点提出すること（例；詩、歌、絵画など）

これらの条件について、州オリビック委員会が審査し、条件を満たしていれば、全員が受賞する仕組みである^{注4)}。

(2) 表彰式は、州議事堂において、オーストラリアオリビック委員会役員（教育担当理事）、州教育大臣、オリンピアンらが出席して華やかに挙行された。さらに、各州（計8）の受賞者から代表各1名が、国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラムに参加する道が開かれていた。

(3) クーベルタン賞の評価について、長年現地でオリビック・ムーブメントに携わってきた関係者（クイーンズランド州オリビック委員会教育委員会）にインタビューを行ったところ、以下の回答が得られた。

- ・学校におけるオリビズムの普及に効果がある
 - ・オリビックのイメージが単なるエリートスポーツではなく、スポーツを核にしたバランスのとれた全人教育にあることが、学校において認知されるようになった
 - ・クーベルタン賞にふさわしい生徒を選考するにあたり、学校の教師と生徒の両方にオリビズムが認知された
 - ・学校において体育やスポーツの地位が向上した
- また、受賞した生徒が通う学校のいくつかのウェブサイトには、受賞者の写真が説明文と共に掲載され、クーベルタン賞を受賞した生徒が学校の誇りとなっている様子を見て取ることができた。

4. オーストラリアの新たな動き

これまで見てきたように、オーストラリアはクーベルタン賞の先進国であり、四半世紀にわたり、オリビズムを体現した多数の高校生を表彰し、高等学校におけるオリビズムの普及・促進に寄

与してきた。ところが、2019年に従来のクーベルタン賞に代わり、同国オリビック委員会の主導で新しい事業『Australian Olympic Change-Maker』プログラムがスタートした⁴⁾。その目的は、学校やコミュニティで変化を起こす若者が国中から集まり、Change-Makerのためのユニークな機会を提供するというものである。

2019年のテーマは「change」で、応募者は彼らが学校やコミュニティでどのように変化を推進しているかがわかるような1分間のビデオを提出した（同年には全国で450本のビデオが提出された）。その後、各州のサミットを経て、最終的に26人の生徒が選考され、ナショナルサミットに参加した。

このプログラムの特徴は、生徒が学校や地域で変化を起こす行動を奨励するものであり、サミットの開催は、生徒が学校を超えて、それぞれの活動や発言を共有する刺激的な機会になると考えられる。また、生徒が何を考え、どのような行動を起こしているのかを大人が把握するシステムにもなっていると言える。

一方で、そのウェブサイト⁴⁾には、オリビズムやオリビック教育といった用語は影をひそめていた。残念ながら、従来の「クーベルタン賞」を通じて培われてきた、オリビズムに基づく教育を学校において普及・推進するという視点は喪失されたと見ることができよう。

以上、ドイツとオーストラリアにおけるクーベルタン賞について見てきたが、日本でクーベルタン賞を創設する意義はあるであろうか。

5. 日本におけるクーベルタン賞創設の意義

日本の社会に目を向けると、いじめ、暴力、ハラスメント、問題に出くわしても見て見ぬ振りをするなど、人間性に関わる諸問題が頻出している。また、スポーツの健全な発展のためには、競技結果だけでなく、オリビックの本来の目的や役割を幅広い視野で認識する必要があり、メダル至上主義のようなオリビックに対する偏狭なイメー

ジを変えていくことが求められている。

クーベルタン賞の創設が日本のオリンピック・ムーブメントに位置付く背景には、次の諸点を挙げることができる。

- ・IOCは、2014年12月に将来のオリンピック・ムーブメントの方向性を示す『オリンピック・アジェンダ2020』を採択し、提言22に「オリンピックの価値に基づく教育の普及」を掲げている⁵⁾。
- ・日本オリンピック委員会（JOC）による『JOC 将来構想』（2017）では、「JOCの3つの役割」の一つに「オリンピズムの普及・推進」が掲げられ、「JOCの5つの活動」の一つに「オリンピック・ムーブメント推進」が記載されている。そこには、「現在の課題」として「JOCの行うオリンピック・ムーブメント活動への国民の理解が十分と言えない」点が指摘されており、「今後のJOCの取組み＝オリンピックの価値・スポーツの価値の拡大」では、「④オリンピック教育プログラムの学校教育への導入推進」と「⑥表彰制度の拡大」が明記されている⁶⁾。

JOCは平成23年度から中学2年生を対象とする「オリンピック教室」の事業を実施し、研修を受けたオリンピアンによる授業実践を日本全国で展開している⁷⁾。オリンピアンが自らの経験をオリンピックの価値と結びつけて語る授業は大変好評であるが、実際にこの授業を体験できる生徒は全国の同学年生の人数から見ると、ごくわずかに過ぎない^{注5)}。

また、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催決定を受けて実施されるようになったオリンピック・パラリンピック教育には、関心や認知度、実践の状況に地域差が大きいことが推測され、学校内の教員にも温度差があることが指摘されている⁸⁾。

こうした状況に鑑みれば、中学・高校などの若い世代に、全国であまねくオリンピズムを伝えていくツールが必要ではないだろうか。オリンピックの原点であるクーベルタンの思想を重視したオ

リンピズムの普及・教育活動を展開することで、生徒がオリンピックやスポーツの価値を学び、それらを自分の生活や生き方に生かしていくことができる。また、アスリートはオリンピズムを知ることによって、競技人生において心の支えとし、救われる局面があるにちがいない。

オリンピズムに適った模範的な生徒を顕彰するという「クーベルタン賞」は、ドイツとオーストラリアの実践例から明らかのように、学校の生徒・教師にオリンピズムを周知していく格好のツールになりうる。また、この賞は学校を超えて、受賞者の家族や所属クラブ、地域にも波及効果があるであろう。

日本の現状では、学校の生徒を対象とした「クーベルタン賞」の牽引役には前述の背景からJOCが最も相応しいと考えられる。また、生徒を対象にすれば、学校と不可分であることから文部科学省や地方公共団体の教育委員会等の教育行政との連携・協力も不可欠である。体育の側面からは、スポーツ庁や中学校体育連盟、高等学校体育連盟、都道府県の体育協会、個別の中央競技団体（NFs）との連携・協力も視野に入れられるであろう。さらには、JOCと共に日本のオリンピック・ムーブメントを担う組織としてNPO法人日本オリンピック・アカデミー（JOA）や日本ビエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）からの側面支援も有意義であると思われる。

ま と め

学校の生徒を対象にしたクーベルタン賞は、ドイツやオーストラリアを中心に、規模の差はあるものの、世界的に展開していた。賞の趣旨は、近代オリンピックの創始者ビエール・ド・クーベルタンの教育思想に基づき、スポーツを中心に据えながら、学業、社会活動への取り組み、人間性を重視し、バランスのとれた模範となる生徒を表彰するものであった。その成果は、学校の教師・生徒へのオリンピズムの普及・促進に効果があり、

学校外への波及効果も見られた。

こうした海外の事例を参考に、日本の状況に適した基準を設定して学校の生徒を対象とした「クーベルタン賞」を創設することで、日本においてもオリimpiズムの普及・浸透を根底的に推進することができると考えられる。その実現のためには、JOCが主導的立場になり、教育行政や体育関連組織、オリimpiック・ムーブメントの組織等との連携・協力が鍵になると考えられる。

本研究は、令和元年度国士舘大学体育学部附属体育研究所の研究助成により実施された。

注

注1) ドイツでは、ラインラント・プファルツ州 (2002年～)、ヘッセン州とテューリンゲン州 (2004年～)、ニーダーザクセン州とザールランド州 (2008年～)、からバイエルン州 (2011年～) でクーベルタン生徒賞が実施されている。

注2) ドイツでは、日本でいう教科としての「体育」を「スポーツ」と表記している (スポーツの授業)。

注3) 選考基準は、以下の3者で同意されたものである。クーベルタン家代表ジェフロワ・ド・ナヴァセル・ド・クーベルタン氏 (故人)、ドイツ・ピエール・ド・クーベルタン委員会 (DPCK)、国際ピエール・ド・クーベルタン委員会 (CIPC)

注4) 筆者が2002年に視察したクイーンズランド州で開催されたクーベルタン賞の授賞式では、約200名の生徒がその年の受賞者となった。

注5) 「オリimpiック教室」の開催数は、増加の一途をたどり、平成30年度は63校199クラス、合計

6,652名の生徒が参加した。しかし、文部科学省による平成30年度学校基本調査⁹⁾によれば、中学校における1学年の人数は1,052,517であり、全国で「オリimpiック教室」に参加できた生徒の割合は0.006%に過ぎない。

引用・参考文献

- 1) Thüringer Ministerium für Bildung, Jugend und Sport (2019) Pierre de Coubertin Schülerpreis 2019.
- 2) Landessportbund Thüringen, Pierre de Coubertin-Schülerpreis.
- 3) Pierre de Coubertin Awards. Queensland Olympic Council.
- 4) オーストラリアオリimpiック委員会ウェブサイト. Australian Olympic Change-Maker, <https://www.olympics.com.au/resources/articles/australian-olympic-change-maker/> (2020年1月25日閲覧)
- 5) IOC (2014) Olympic Agenda 2020 20+20 Recommendations. https://www.joc.or.jp/olympism/agenda2020/pdf/agenda2020_en_20160201.pdf (2020年1月25日閲覧)
- 6) 日本オリimpiック委員会 (2017) JOC 将来構想～人へ、オリimpiックの力～. https://www.joc.or.jp/about/pdf/future_pamph.pdf (2020年1月25日閲覧)
- 7) 日本オリimpiック委員会 オリimpiック教室 <https://www.joc.or.jp/event/class.html> (2020年1月25日閲覧)
- 8) 青柳秀幸 (2018) 東京2020大会を契機としたオリimpiック・パラオリimpiック教育の現状と課題, 日本オリimpiック・アカデミー, JOA Times, 第41号, pp.53-54.
- 9) 平成30年度学校基本調査 中学校概要 <https://data.gakkou.net/h30chugaku001/> (2020年1月25日閲覧)